

植物たちの生き方に**学****ぶ**

「植物の命はとるに足りない小さなもの」と思われがちです。しかし、植物たちは、私たち人間と同じしくみで生きており、同じ悩みをもっており、日々懸命に努力をしています。このようにお話しすると、反論や疑問が生まれます。たとえば、「同じしくみというけれど、植物は動きまわれないではないか」とか、「私たち人間と植物の“同じ悩み”とは、何か」とか、「植物は日々努力しているというが、何のために、どのような努力をしているのか」などです。これらの反論や疑問を掘り下げていけば、植物たちが生きるために秘めている“不思議な力”や“しくみ”が浮かびあがり、それらに支えられている“植物の生き方”が見えてきます。その生き方の中に、私たちが学ぶべきものが多くあるはずですよ。



講師 田中修 氏 (甲南大学 特別客員教授)

1947年、京都生まれ。京都大学農学部卒業、同大学院博士課程修了。スミソニアン研究所（アメリカ）博士研究員などを経て、甲南大学理工学部教授を務め、現職。農学博士。専門は、植物生理学。所属学会は、日本植物学会、植物化学調節学会、水草研究会。

※主な著書、出演番組は裏面参照

11月21日(月) 19~21時

参加費無料・申込不要

くまもと県民交流館パレア 9F 会議室1

(テトリアくまもとビル(鶴屋東館)9F TEL:096-355-4300)

どなたでも

ご参加いただけます

完全自立して生きている植物の生き方から人生を見つめよう

田中先生ご出演のラジオで聞いた「植物は土と水分があれば、葉に日光が当たることにより栄養を作りだし、栄養を作れない動物より優れています」と言うお話が印象に残っています。つまり、自力で生きて行ける所に植物の凄さがあると言うのです。

植物が季節をほぼ正しく認識して花や実をつけている事も、良く考えたら凄い事で、脳の無い植物がどうやって季節を知りうるのか、不思議でなりません。

私達動物も、本来は本能的な感覚を持っていたはずですが、知識が先行して本能的な感性を失いつつあるのではと感じています。植物の生き方を学ぶ事で、私達人間の生き方のヒントをつかむことが出来るのではないかと感じています。 (常任理事 砥上幸一郎)

《講師著書（単著のみ）》

- 「植物はすごい 七不思議篇」（2015 中公新書）
- 「植物の不思議なパワー」（2015 NHK出版）
- 「植物は命がけ」（2014 中公文庫）
- 「植物は人類最強の相棒である」（2014 PHP新書）
- 「フルーツひとつばなし」（2013 講談社現代新書）
- 「植物のあっぱれな生き方」（2013 幻冬舎新書）
- 「植物はすごい」（2012 中公新書）
- 「タネのふしぎ」（2012 アイ新書、ソフトバンククリエイティブ）
- 「都会の花と木」（2009 中公新書）
- 「花のふしぎ100」（2009 アイ新書、ソフトバンククリエイティブ）
- 「葉っぱのふしぎ」（2008 アイ新書、ソフトバンククリエイティブ）
- 「雑草のはなし」（2007 中公新書）
- 「入門たのしい植物学」（2007 講談社、ブルーバックス）
- 「クイズ 植物入門」（2005 講談社、ブルーバックス）
- 「ふしぎの植物学」（2003 中公新書）
- 「つぼみたちの生涯」（2000 中公新書） など

《講師出演番組》

朝日放送ラジオ

「おはようパーソナリティ 道上洋三です」

NHKラジオ

「夏休み子ども科学電話相談」

「カルチャーラジオ」

「日曜カルチャー」

NHKテレビBSプレミアム

「アインシュタインの眼」

朝日放送テレビ

「ガラスの地球を救えスペシャル『ワンダーアース』」

日本テレビ

「世界一受けたい授業」

フジテレビ

「宇宙一頭のよいワイドショー」

BS日テレ

「加藤浩次の本気対談『コージ魂』」 など